

橋渡しの中級作文教育 —— 初級作文からレポート・論文へ ——

藤村 知子・金子 比呂子・伊丹 千恵

(1994. 11. 1 受)

0. はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下センターと略す）では、4月に日本語を勉強していない状態で入学してくる学生に対し、授業開始後約4週目に当たる5月中旬から、ほぼ二週間に一回の割合で課題作文を課している。このようにかなり早い時期から作文教育を組み込むのは、外国語としての日本語の教育において、作文が文法、語法などを定着させるのに有益な作業であるからである。特に、初級者がほとんどであるセンターの一学期の作文は、日本語で書き慣れさせるとともに、既習文型の定着をはかるために欠かせないものである。⁽¹⁾

だが、予備教育を受けた後に入る大学では、わずか一年前に日本語学習を開始した留学生といっても、容赦なくレポートや論文を書くことを要求される。

したがって、予備教育の作文指導においても、最終段階では学生がレポートや論文を書くための方策を獲得できるような設定をすることが必須であるが⁽²⁾、初級段階で文型定着のための手段として書かせる作文と、レポートや論文との間には大きなギャップがある。このギャップを埋めるために、どのような段階的な指導を行っていけばいいのか。⁽³⁾

本稿では、そのような「橋渡し」としての、中級作文教育の試みを報告したい。

1. 予備教育における「中級」の課題

センターでは一年間の授業を三学期制で行っている。

第一学期（4月～7月）

第二学期（9月～12月）

第三学期（1月～3月）

第一学期は、日本語を学習したことのない学生を対象に、日本語の基本的な文型を習得させるための時期である。この時期の主教材『初級日本語』全28課は問答形式の会話文となっており、その文にはその課で導入したい文型が入れ込んである。授業も、表現意図と使用場面を配慮した文型導入、及び口頭練習を中心と

した文型運用練習の組み合わせで総合的に行われる。

第三学期は、大学での勉学に耐えられるよう、生の素材に対応できる技能を身につけさせる時期である。授業では、新聞記事や一般書からの論文等で編まれた主教材『上級日本語』の読解をはじめ、ニュースや講義を聞き取る聴解練習を行っている。また自分の意見を口頭で発表する弁論大会もあり、日本語技能の総仕上げの時期と位置づけられる。

第二学期はこの間にある過渡的な時期である。総学習時間300時間終了が中級の目安であるとすれば、この時期は中級に当たると言えよう。主教材は21編の読み物からなる『中級日本語』で、一学期に習得した基本的な初級文型、語彙の上にさらに読み物に出てくるような書き言葉の文型を積み上げる方式で、初級と一応の連続性を保っている。だが、4月からの積み上げ方式で編成してきたカリキュラムと、大学へ送り出すためにはこれだけの技能は是非つけておいてやりたいという予備教育の最終目標から下ろしてきたシラバスに質の違いがあるため、それらを連続させる工夫が是非とも必要となる時期なのである。

2. 中級作文の目標と題材

二学期中級の作文教育では、上記のような一学期初級から三学期上級への橋渡しを行うために、前半期と後半期とに分けて題を考えている。前半期は、初級文型を土台にレポートを意識した説明文を書かせており、後半期には小論文を書く前段階として意見文を書かせている。なお、前半期と後半期の目標は以下のとおりである。

前半期の目標

説明文を書かせるにあたり、次のような到達目標をたてている。

- ・ 作文を構成する単位となるパラグラフ（意味段落）が作れる
- ・ 主題を展開して、文章を構成することができる
- ・ 論旨の明確な作文が書ける

これは、この時期に多い以下のような表現上の問題点を解決するためである。

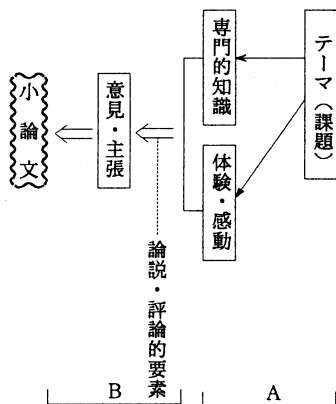
- ・ 一問一答式の切れ切りの表現しかでてこない
- ・ 単文を連ねるだけで、全体をあるまとまりのある思想として表現できない
- ・ 結局何が伝えたいのかははっきりしない

一学期には書き慣れさせることによって文型、語法の定着をはかることが目標だったため、作文の題も学生に身近な話題で習得させたい文型をできるだけ多く使わせられるものという観点から選んでいた。二学期の前半期には、その一学期のまとめとして「夏休みの思い出」、さらにそれを発展させた説明文「自分の国の紹介」、「〇〇と私たちの生活」、「研修旅行の報告」等を書かせている。「自分の国の紹介」「〇〇と私たちの生活」は、主教材である『中級日本語』との有機的な関連を意識して設定した課題である。

後半期

大学入試、さらには大学で論文を書かねばならぬことを考えてこの段階の最終目標は小論文を書くこととした。

小論文とは、「論理的文章のあまり長くないもの、作文の中で、論説・評論的要素を含むもの」「そう長くはなくても、ある主題（テーマ）を客観的に捉え、一般論の形で論じたもの」と定義され、右図⁽⁴⁾のように簡略化できる。



図のAの部分は前半期の目標で、AにBの部分を加えることが後半期の目標となる。Bの必須条件は、確固とした自己の主張があるということである。⁽⁵⁾

この時期の題材は、「経験（A）をもとにして、自分の意見を言う（B）」「資料（A）をもとにして、自分の意見を言う（B）」「相手の意見（A）を踏まえて、自分の（反対）意見を言う（B）」といった条件を満たすものを選んでいる。1993年度の題は「日本で見たこと」「テレビのコマーシャル」「厳しい大学入学試験に反対する」であった。

3 指導方法

3.1 作文指導の担当と指導手順

作文は、テキスト中心の授業を担当しているクラス担当が指導にあっている。年度の初めに各クラス担当が集まり、その年度の指導内容を考え、教材を整える。それらを使って、基本的に全クラス共通の指導を行っている。

作文は宿題にするが、作文指導担当者は宿題を課す前に、課題の説明や、課題に関する口頭での質疑応答等の指導をしている。これは、出てきた作文の誤りをいわば対症療法的に訂正するだけでなく、誤りが出ないような「事前指導」をすべきだという考え方による。

数日後学生が提出してきた作文は、全て保存用コピーをとった上で、添削し、返す。この際に、クラスで共通にみられた誤用を指摘したり、大切な訂正事項について説明を加えたりする。さらに、クラス授業後の個別指導の時間に、個々の学生に表現意図を確かめながら、誤りの訂正や、文構成の指導等を行っている。

3. 2 中級作文の指導項目、指導方法

以上のような大目標はあるものの、肝心なのはそこへ至るための段階的な指導である。表1は、その内容についてまとめたものである。なお、資料は本論文の最後にまとめて掲載してある。

表1 中級作文の指導項目

順	課題	中級日本語の対応課	分量	目的・意図
1	「夏休みの思い出」		400 ～800字	一番印象に残ったことを効果的に、かつ簡潔に書く
2	「自分の国の紹介」 資料 a	1課「りんご」 3課「日本人と洋服」 4課「日本の国土」 5課「桜の花」 7課「日本人の食生活」 9課「住まいの工夫」	800字 以上	「話し方」の授業で口頭発表したものをもとに書く。書き言葉と話し言葉の違いを意識する
3	「〇〇と私たちの生活」 資料 b	10課「天気のことわざを考える」 11課「ガラスの利用」	800 ～1000字	「ガラスの利用」の構成を踏まえて書く。説明文の総まとめ。必要に応じ資料を調べる
自由	「研修旅行」			研修旅行に出かけた際の旅行文。課さないクラスもある
4	「日本で見たこと」 資料 c	13課「身振りと言語」 14課「抗議する義務」	800 ～1000字	根拠としての事実を挙げて自分の意見を書く
5	「テレビのコマーシャル」 資料 d	15課「テレビ映像の伝えるもの」	1000 ～1200字	立場を明確にし、資料を参考に理由を詳しく説明しながら、自分の意見を書く
6	「厳しい大学入試は必要ではない」 資料 e	18課「騒音問題」	600 ～800字 (90分)	制限時間内にまとめて作文にする。自分の論旨をまとめ、筋を通しながら反論するだけの表現力を養う
期末試験	「意見に反対する」 資料 f	中級終了	600 ～800字 (90分)	90分で中級までの学習事項を総動員して、ある人の意見に対する反論をまとめる

4. 指導例

4. 1 「夏休みの思い出」

初級の延長線上の作文である。一番印象に残ったことをテーマとし、まとまりのある文を書くことが目的である。しかし、題を与えるのみであると、構成する力が弱い学生は、二～三文で次の話題に移っていく散漫な作文を書きがちである。その傾向を防ぐため、モデル文を与えている。

4. 2 「自分の国の紹介」

「ていねい体」での口頭発表から「ふつう体（である体）」による文章化を目的とする。書き出し、話題の展開などテキストから表現の形式を拾い出して使わせたい。しかし、日本語で書かれた本文は学生にとっては、外国語であるために、どこが構成上のポイントになっているのか、わからない場合が多いようである。拾い出すことが困難な学生のためにはあらかじめ枠（グリッド）を作り、示しておくのも一つの方法である。以下、その例を挙げる。

4. 2. 1 第1課「りんご」対応

1. 次の表を完成させなさい。

	りんご	ぶどう	あなたの国の果物（ ）
a どんな所で作られるか		雨の少ない地方	
b 有名な産地		山梨県	
c どんな花が咲くか		黄緑色の花	
d 食べる季節		夏の終わりから秋	
e どんな種類（色）のものがあるか		むらさき色や黄緑色のもの	
f 食べ方のいろいろ		そのまま 干しぶどう (ワインをつくる)	

2. あなたの国の果物の中から一つ選んで、説明してください。

テキストを見ながら、1.の表をうめさせる。次に、「ぶどう」のa～fをテキストの文の流れにしたがって、りんごの記述と入れ替えて読ませる。他の果物についての聞き取り練習を入れてもよい。最後に、自国の果物について表をうめ、文章化するようにさせる。

4. 2. 2 第3課「日本人と洋服」対応⁽⁶⁾

_____人と_____

- 1 あなたの国に日本の着物のようなものがありますか。
- 2 何という服ですか。(_____ というのはどんな意味ですか。)
- 3 どんな服ですか。
- 4 ふだんそれを着ますか。
- 5 その服のいいところや悪いところはどんなところですか。
- 6 いつごろから洋服を着るようになりましたか。
- 7 今、どんな時 _____ を着るのですか。

国	日 本	例 ベトナム
1 あるかどうか		ある(女の人の服)
2 名前(意味)		アオ ザイ→長い服(服)(長い)
3 どんな服か		中国の服に似ているがワンピースではない足のところまである長い上着+太いズボン
4 ふだん		70才以上: 着ている 若い人: ブラウスとズボン
5 いいところ 悪いところ		動きにくい(上着が長い)
6 いつごろから洋服を		? わからない
7 どんな時、_____を着るか		結婚式や入学式など特別な時
8 そのほか		

「りんご」の場合と同じように、まず、テキストを読みながら、表の「日本」の部分を書き入れる。次に、1～7の質問に口頭で答えさせる。前の表の「ベトナム」は学生に書き入れさせた例である。最後に、400～600字でまとめる。

4. 2. 3 第4課「日本の国土」対応

1. 次の表を完成しなさい。

	日 本	あ な た の 国
1 国の位置		
2 国の構成		
3 国の形		
4 国土の特徴		
5 生活への利用		

4. 2. 4 第4課「桜の花」対応

1. 次の表を完成しなさい。

	桜	あなただの国の花or あなたの好きな花
1 なぜその花を選んだか	日本の代表的な花	
2 何種類くらいあるか		
3 花の色		
4 花の咲く時期		
5 咲いてから散るまでの時間		
6 花に関係のある行事		
7 その花の特別な意味など		

「日本の国土」、「桜の花」も進め方は「りんご」、「日本人と洋服」の場合と同じである。最後に、表にそって文を書かせる。

このように、「質問に答える」、「表を作る」、「表にそって口頭で発表」等を重ねて、何度もテキストの流れをたどっておけば、文の構成、文型の使われ方等に慣れ、文章化する際にも抵抗なく取り組むことができる。⁽⁷⁾

さらに、各部分を章だてにして積み重ねていけば、各々800字程度、全部で2400～3200字のレポートに発展させることも可能である。

4. 3 「〇〇と私たちの生活」

まず、テキスト11課を要約させ⁽⁸⁾、その構成を把握させる。これは、テキストの文がモデル文となるので、文の流れをよくつかんでいれば書きやすいからである。使用されている言い回し、文型、接続詞に注目させる。学生はそれらを使うことによって、説明文の書き方の流れに乗ることができる。

文の流れをはっきり示すために、資料bを与えている。

本論の進め方としては、次の三つの書き方がバリエーションとして考えられる。

4. 3. 1 歴史にそって述べる。

〇〇は・・・年前に・・・で 作り出された／生み出された。

〇〇の発明によって・・・

そして、人間は・・・だけでなく・・・に成功した。

・・・はその例である。

また、・・・

さらに、・・・

4. 3. 2 いい点、悪い点を述べる。

〇〇のいい点は、・・・

しかし、〇〇には不便な／悪い／困った点もある。

それは・・・

4. 3. 3 取り上げたものの効用を述べる。

次の例は、学生の作文を添削したものである。音楽の持っている心の「良薬」としての効用、映画・スポーツなどの場面で感激を高めるものとして、また、医学の治療の場面での効用が述べられている。

音楽と私たちの生活

昔から、音楽は人間の気持ちと深い関係がある。人間の気持ちは秋の空のようによく変わるが、特に、悲しい時に音楽は良薬である。だれでも音楽を聞いたり、ピアノを弾いたりしているうちに、不安定だった感情が静まってきたという経験があるだろう。しかも、楽しい時は、音楽によっていっそう楽しくなる。

また、映画や踊りなどの中で、音楽はよく伴奏として使われる。そして、音楽は映画や踊りの伝えたい意味を強調する。それで、見る人や踊る人はその深い意味がもっと理解できるようになって、想像の世界に引き込まれていく。さらに、国際スポーツ、例えばオリンピック大会では、勝った国の国歌を演奏して、その国の強さを讃え、感激を高めるのである。

それだけでなく、医学の世界では、音楽を使って、植物状態になった人を治すことも多いそうだ。このように、人間は新しい音楽の使い方を考え出してきた。

最近では、CDやステレオシステムの開発により、家にいながらよりよい音楽を聞くことができるようになった。ストレスの多い私たち現代人の暮らしと音楽の結び付きは、これからもいっそう深まっていかにちがいない。

(マレーシア 女子学生)

4. 4 「日本で見たこと」

4. 4. 1 指導内容

来日してから、ほぼ7か月たったこの時期、自らの経験を人に知らせる文章のまとめとして、日本に来てから印象的だった経験を描写させ、その描写に自分の意見、主張等をつけ加えたものを書かせて、スピーチとして発表させている。⁽⁹⁾

かつては教科書『中級日本語』14課「抗議する義務」をモデルに書くよう指導していたが、「抗議する義務」では、全体を通して、一つの主張が貫かれており、前

半部の例は主張を補強する根拠として、後から選ばれている材料にすぎないため、体験談に意見を加える場合のモデルとはなりにくい。それで、最近では、体験談から自分の意見へという流れで書く場合のモデルとして、過去の学生のスピーチ原稿を与えている。本格的な論文、あるいは意見文を書くのであれば、主張の方が先にあって、そのための材料として経験の描写が選ばれるという順番であるはずだが、体験談であれば、印象的なエピソードからある考えに導かれるという流れになる。ここでは、どちらの流れで組み立ててもいいことにし、学生には、描写である前半部と、意見、主張である後半部との接続の調整を課した。

4. 4. 2 指導過程

まず、ホームステイ、研修旅行等を通じて得てきた経験から、学生の日本、日本人に対するイメージがかたまりつつあるこの時期に、以下のようなやりとりを設定する。これは、学生が、実際に自分で体験したわけでもないのに、聞きかじった「日本経験」によって紋切り型の「日本のイメージ」を作ってしまうこと、表現力の不足を自分の主張を強く押し出すことによって補おうとするためか、根拠のはっきりしない浅薄な日本批判を繰り広げることなどを避けるためである。

話し方 <日本、日本人の印象> 練習シート

想像していた日本、日本人	意外だったのは
日本人はまじめで勤勉だ	大学生はあまり勉強していないようだ
日本の主婦は夫に従順で、地位も低い	主婦は家の財布を握っている
日本人は恥ずかしがりやだ	若者は平気で抱き合ったりしている
日本は豊かな国だ	募金を求められることが多い
日本人は正直で誠実だ	政治家の使途不明金を追及しない

次に、個々の学生にとって、どんなことが一番意外だったか発表させる。そして、この発表をもとに、最終的な作文を書く前のメモ的な小作文を書かせる。

毎度、外へ行くとき、ちょっと周囲を見回しただけでも、抱き合ったり、手を握り合ったりしている恋人同士がいっぱいいます。私はこんな景色を見ると、ちょっと不思議に思いました。というのは、カンボジアの若者と比べるとだいぶ違うからです。特にカンボジアの女性はそういう光景が恥ずかし

がるそうです。でも、私はそういうやり方は日本人の習慣だからという質問が持っています。前は日本人は恥ずかしがる人たちだと思っていました。

(中略)

日本では人が権利を持っているし、法律的に自由にさせるのだから、市民は自分がよいと思ったら何でもやれます。前に言った若者がいてもかまわないし、政治の腐敗も起こります。最近、テレビの画面を通して、税金を勝手に使っている政治家のことを伝えています。どうして日本人は怒らないのですか。

(結論はまだ考え出していない。「若者の景色」とつなげない。)

[……は、学生が用いた表現をそのまま記載したことを表す。]

()内は、学生が書いてきたメモだが、描写であるA部と、主張であるB部の断絶に悩んでいることが窺える。そこで、個別指導の時間に彼を呼んで話し合ったところ、彼が本当に言いたいのはB部の主張であることが分かったので、B部を支えるために「日本の募金活動のやり方」の例を採用することをすすめた。以下は、その後、教師に添削され、自らも推敲を重ねた末、最終的に仕上がった作文である。

来日の3週間後、私はこんな経験をした。私が友だちと一緒に新宿へ行ったときのことだ。

駅を出たところで、私たちは一人の新聞やサイン帳を持っている女性から止められて、緊張でびっくりしてしまった。どうして私たちを止めるかと思った。すると、彼女は本を出し、私たちが外国人であることを承知して英語でサインさせようとした。しかし、私たちが何も言わないので、彼女は理由を示すために、新聞を見せてくれた。新聞の中には、貧乏な国の生活、特に子供の苦しい生活に関して書いてあった。見ているうちに、そういう国を助けるために、お金を出す、即ち募金せよと言っていることが分かってきたので、あるお金を渡した。私はいい人になったような気になった。

しかし、その後だんだん前のことが「変だ」という気持ちになってきた。というのは、日本は世界一お金持ちの国だし、いろいろな国に協力しているのに、実はそんな募金のしかたをするなんてよくないと思えたのだ。

このような募金は、お金を受け取ったのがいい人か、あるいは悪い人か分

からないから、そのお金が目的の国に届くか、その人が自分の財布に入れてしまうか、分からない。その結果、日本人あるいは私のような外国人にとって、残念なことがあるかもしれない。そのお金がどこへ行くか、即ち行方をチェックしなくてもいいのだから。

だいたい日本人は自分のお金の行方はあまりチェックしていないようだ。その一つの例を挙げると、最近ではテレビの画面を通して、日本の政治腐敗が多くなってしまったということが伝えられている。それは日本人が税金を払っても、政府が自分のお金を何のために使うのか、あまり考えていないからであろう。だから、そのお金を自分の財布に入れてしまう政治家がかなりいるようだ。どうして抗議しないのだから。あるいは、日本人はお金持ちになったから、自分のお金がどのように使われてもいいと思っているのだから。

でも、教科書の14課に書いてあるように、自分に直接害が及ばなくても、不正に抗議することは義務なのである。

したがって、日本人は自分のお金が正しく使われるようにもっと厳しくチェックすべきだ。また、駅などで知らない人がやってきて募金するようなやり方はなくした方がいいのではないか。 (カンボディア 男子学生)

苦勞の末、上記の学生は自分が意外だと思った「日本の募金活動のやり方」という例と、「お金の行方をチェックすることによって、政治腐敗を許すべきではない」という主張を、一応一貫して述べることに成功したと言えよう。

学生は、「初めは経験に感想をつけ加える作文と思って書いていたが、その流れではどうもうまくいかない。それで、主張を貫くために、材料としての経験を選ぶのだというように発想を転換したら、経験と主張がうまくつながった。意見文はやはり主張や意見の方が先にあって、根拠としての事実、経験は後から探すものだと分かった。」と感想を述べている。このような過程を経験させることが三学期、さらに大学で論文を書くところへ向けての動機づけとなるのである。

4. 5 「テレビのコマーシャル」

4. 5. 1 テーマの選択

前項の「日本で見たこと」から、二学期の作文授業の最終目標である意見文の作成に向けての練習が始まり、二学期5番目の課題となる「テレビのコマーシャル」もその延長線上にある。この課題では、意見を述べる際に必要となる「意見」

と、それを支える「根拠」⁽¹⁰⁾のうち、根拠の挙げ方に主眼を置いた。根拠の挙げ方にはさまざまあるが、この課題では、資料、特に図表を取り上げることにした。

主教材の『中級日本語』で取り上げたテーマのうち、図表を使った説明が効果的であり、なおかつそれが入手しやすいという条件にあうのは、テレビ番組に関係するものであろうということになり、テレビのコマーシャルを作文の題材として選んだ。

4. 5. 2 資料の与え方の問題

資料は、本来、意見を述べる際に根拠を確かなものにするために使うものである。したがって、「資料に基づいて意見を述べる」というのは、本末転倒の感があるが、「意見を述べるために資料を使って根拠を挙げる」という手順で作文を書かせるためには、参考文献を掲げる、あるいは参考文献の探し方を教えることなどが必要となる。しかし、このような「資料調べ」は、はっきりとした動機付けがなされる大学入学直前、あるいは入学後に行う方が、より効果的であり、また、予備教育の中級段階は、日本語の文構造や文章構造を獲得し構築する途上であると位置づけ、この課題では、調べることもより書くことを優先させた。

以上の理由から、あらかじめ教師側で資料を用意し、それから考えられることを書かせることにした。

4. 5. 3 指導内容

作文の事前指導の段階で、資料dのとおり、学生には、作文のアウトラインとテレビのコマーシャルに関する図表及び引用の表現を記したものを渡し、書き方について説明した。

アウトライン⁽¹¹⁾は、本来、作文の書き手が作成するものであるが、教師側で用意した理由は、それまでのものと異なり、この課題に関してはモデル作文がなかったためである。そのため、作文のアウトラインが立てられるような質問を提示し、その質問に答えれば、まとまりのある作文が書けるように配慮した。

次の例は、教師側が提示したアウトライン通りに学生が書いた例である。

I 私たちは、多くの広告に囲まれている。(以下略)

II 1987年に、日本の1年間の広告費は5.7兆円で、その中でも、テレビの

広告が多く、(金額の説明。以下略)。

Ⅲ ①さて、どうしてテレビの広告はそんなに多いのだろうか。②まず、スポンサーの見地から考えてみよう。③広告するのは、ある会社、あるいは、機構が公衆に、新しい産品とかサービスを知らせるためだと言えよう。④だから、スポンサーは、できるだけ、ほとんどの公衆に、広告したいように思える。⑤1965年から、日本ではテレビが普及し、テレビの観衆はだんだん新聞の読者より、多くなったのである。⑥テレビがない家庭も、むしろ珍しくなってきたのである。⑦それとともに、テレビで広告する会社や機構もだんだん増えてきた。⑧今や、日本では、テレビが一歳の子供から70歳のお婆さんにまで見られているので、テレビで広告するのは、結構、新聞で広告するのより、有効だと言えよう。

Ⅳ 次に、消費者の観点から考えてみよう。(中略)生活に役立っている人が多いことがわかる。

Ⅴ では、日本の若者はテレビコマーシャルをどのように考えているのだろうか。(中略)コマーシャルを減らして欲しいと考える若者が存在することがわかる。

Ⅵ 日本のコマーシャルは、シンガポールのよりおもしろい、観衆に注意を引き付けられるなどといういい点がある。しかし、いい点ばかりではなく日本のテレビのコマーシャルは、欠点もある。(欠点の説明。以下略)

Ⅶ このように、テレビのコマーシャルは、すかり役立っているには、役立っているが、良くない点も厳然として存在するのを承知せねばならない。これからも、おもしろくて、内容のいいテレビのコマーシャルを楽しみに待っている。
(シンガポール 漢字系 男子学生)

[ローマ数字は段落の番号を、○つき数字は文番号を示す。]

4. 5. 3. 1 課題解答方式⁽¹²⁾と図表の効用

この作文全体の字数は1800字近くになっているが、それを可能にしたのは、教師から提示された図表を見て自分で問題を設定し、根拠を挙げながら解答を出していくという「課題解答方式」の構成をとっていることにある。それが顕著に見られる第Ⅲ段落を見てみよう。

第Ⅲ段落では、前の段落で資料d図2の媒体別広告費について説明したのを冒頭の文①で承けて「さて、どうしてテレビの広告はそんなに多いのだろうか。」と自分で問題を設定している。文②でスポンサーの事情から取り上げることを告げ、

文③④で広告の必要性を述べている。更に、文⑤～⑦でテレビの普及という根拠を述べた上で、文⑧でテレビは新聞よりも効果的だという解答を引き出している。この課題解答方式は、Ⅳ、Ⅴ段落でも使っている。

文末表現に着目してみると、学生の意見、即ち解答の部分(⑧)と学生が考えた根拠の文(③、④)の文末にはモダリティを伴う表現を使い、事実の文(⑦)には、それを用いないといった使い分けがなされている。他の段落においても資料を引用した箇所については、資料dに挙げた表現を使い、引用であることを明示できている。これらの点も評価できるであろう。

この学生の場合、ある一つの話題、つまり、一つの図表につき一つの問題を設定して解答を出し、それで一段落を構成するという方式をとっているため、一つの段落内部で内容が完結している。したがって、それまでの課題のように、一つの結論を導くために800～1000字を費やして論理を構成しなければならない場合とは異なり、200～300字という比較的短い文章の中で論理を構成すればよい。そのために、書きやすかったのではないかと思われる。その上、この学生の作文は、一つの話題で一段落を構成し、それを次々に積み重ねていくという手法をとったため、長い文章が書けたと考えられる。

このように、図表を与え、一つの図表で一段落を構成し、それを積み重ねて一つの文章にするというやり方は、初級から中級、更にはレポートへの橋渡しを行う段階で必要な練習であると思われる。というのは、初級の生活文的な作文から離れ、やや抽象的な内容を書かなければならなくなると、何を書けばいいのかわからないという学生や、論理に一貫性がつけられず何を言いたいのがわからない作文を書く学生が出てくるからである。そのような学生にとっては、書く内容が図表という形をとって具体化されているというのは、意見文の枠組みを習得するには良い準備練習になるであろう。

4. 5. 3. 2 文章構成－散括式⁽¹⁸⁾

次に、この学生の作文の文章構成を見てみると、Ⅰ／Ⅱ～Ⅳ／Ⅴ／Ⅵ～Ⅶと大きく四つに分かれている。Ⅰで話題設定を行い、それを承けてⅡ～Ⅳの部分で、広告の媒体としてテレビが選ばれているのはなぜかという問題を設定し、その答えをⅢ、Ⅳ段落で述べている。さらにⅤ段落で若者のテレビ広告に対する意見をつけ加え、Ⅵ～Ⅶ段落でテレビ広告の長短に触れた上で、全体を結論づけようとしている。このことから、この作文は尾括式の文章だと言えるだろうが、問題がないわけではない。例えば、3つの部分、Ⅰ～Ⅳ／Ⅴ／Ⅵ～Ⅶ、それぞれに結論

が出ているため、全体を通しての結論が見えてこないということが挙げられる。この作文の書き手もそれを意識して、最終のⅦ段落では、Ⅰ～Ⅳ段落とⅥ段落を結びつけようとして、前者で取り上げた「生活に役立つ」という話題と後者の「テレビ広告の長短」を持ち出し、「テレビのコマーシャルは生活に役立つと言っても、短所もあることを忘れてはならない」と苦心して結論づけてはいるが、文章全体を貫く結論とは言い難いため、結論が三つの部分に分散されている散括式の文章であるといえよう。

また、Ⅴ段落で、「では」と巧みに話題を転換しているが、文章全体からはⅤ段落が遊離した感じを受ける。それをなくすためには、例えば、「日本には、テレビのコマーシャルを減らしてほしいと考える若者がいるが、シンガポールから来た自分にとっては、日本のコマーシャルはおもしろいと思う」といったような一文を入れて、次のⅥ段落につなぐことが必要であろう。

意見文の雛形として指導するのは、「話題設定→議論→結論」といった尾括式または双括式の文章が望ましいと考えられる⁽¹⁴⁾。ほかの学生の例をみると、上記の作文例のように、一つ一つの段落内部で内容が完結し全体としてのまとまりに欠ける散括式の作文や、図表の説明に終始して結論の見えない無括式⁽¹⁵⁾、あるいは、結論は書かれているがそれに至る過程に問題がある作文が出てきた。

これらの問題点を解決するには、教師側で作成したアウトラインを変更する必要があるだろう。

資料dの質問1.～5.を見ればわかるように、全体を統括する論点がないため、まとまりを欠くアウトラインとなっている。特に①～④と⑤の間は、関連性が薄い上に、⑤だけでも独立した作文が書けるほどのテーマである。学生が、「さて」「では」など転換型⁽¹⁶⁾の接続詞を用いて、何とか①～⑤までをつなげようと努力していることから、アウトラインの改善すべき点が見えてくる。

4. 5. 4 事前指導の改善

前項から、アウトラインには全体を貫く結論が必要であることがわかった。そこで、テレビのコマーシャルと新聞の広告を比較して、それぞれの媒体の特徴を考察させるように変更した。これによって、散括式、あるいは無括式の作文は減少すると思われる。

以下のアウトラインは、資料dからの変更点のみを記したものである。

テレビのコマーシャル／新聞の広告

1. 今回の作文の目的

資料について説明する。できれば、それに基づいて意見を述べる。

2. 字数 800～1000字

3. 書き方

- ・表やグラフからどんなことがわかりますか。説明してください。
さらに、あなたの意見を述べてください。
- ・または、「6. アウトライン」にある質問を参考にして書いてもいいです。
- ・現状（現在のようす）を説明するために、あるいは、あなたの意見をわかりやすくするために表やグラフを使ってください。
- ・表やグラフは全部で10枚ありますが、すべてを使う必要はありません。

4. 新しい言葉

マスコミ／マスメディアばいたい いんさつ でんし／媒体（印刷／電子）／スポンサー
消費者／コマーシャル／広告／宣伝／視聴率

5. 表やグラフを説明するときの表現

- ・図1を見てほしい。電通の調査によると、1993年度における日本の広告費は5.1兆円で、その中で最も多いのがテレビのコマーシャルである。
- ・以下は資料 d に同じ

6. アウトライン

①日本の1年間の広告費はどのくらいか。<図1>

- ・広告の媒体——テレビ、新聞など——としては、どんな種類があるか。
- ・その中で、最もよく使われている媒体は何か。

②テレビと新聞とではどんなことが違うのか。<図2～5>

- ・テレビのCMが新聞の広告よりも多くなったのは、いつか。
- ・テレビのCMが新聞の広告よりも多くなったのは、なぜか。
- ・テレビの特徴

←CMにテレビを多く使う会社／視聴率1%は百万人

- ・新聞の特徴

←広告に新聞や雑誌を多く使う会社／新聞の読者の人数

③このように、CMや広告からテレビと新聞の違いがわかる。

これからもそれぞれの特徴を生かした広告が増えていこう。

4. 6 「厳しい入学試験に反対する」

4. 6. 1 指導内容

学生に作文を書くのにかかる時間を聞くと、少なくとも2、3時間という答えが返ってくる。場合によってはインスピレーションがわかかなかったという理由で一日かかったと訴えてくる学生もいる。そこで、ここでは、ある型なり流れにのって表現すれば、短い時間でも書けるということを経験させ、作文はインスピレーションで書くのではなく、一つの技術だ⁽¹⁷⁾ということをおぼえてもらうために、制限時間と、一定の構成の枠ぐみを指定した。

課題は、資料eのような、たぶんに挑発的な意見文を与え、その文を引用しながら反対意見を述べるというものである。以前は「女性と社会」「母親と仕事」などの題で、賛成か、反対か、自らの立場をはっきりさせ意見を述べる、あるいは「死刑は必要か」「試験は必要か」という題で制度等の当為性（なすべし、なすべからず）を述べるという設定にしていた。しかし、テキストにモデル文がなかったこと、学生にとっては初期の段階では漠然とした意見よりも、反対意見の方が書きやすらしい⁽¹⁸⁾ことなどを考慮し、本格的な意見文を書くことへの導入として今の課題に落ちついた。

また、入学試験、教育問題に関する話題はテキストにはないので、学生を挑発するという目的だけでなく、学生に関連語彙、文型を与えるという目的で「刺激文」をつけた。⁽¹⁹⁾

4. 6. 2. 指導過程

まず、学生に刺激文を読ませる。そして、その一部を引用しながら、反対意見を書かせる。その際、資料eの「意見を言うとき大切なこと」の流れに従って書くよう指示する。

学生たちも二学期半ばで事実を順序立てて述べられるようになり、二学期の最終段階では、ようやく反対意見が述べられるところまできたと言える。しかし、コミュニケーションの観点から考えると、あることについてただ自分の意見を言い放しというのでは不十分である。やはり意見を述べるということは相手があることであり、さらに相手を説得できるところまでいく必要がある。説得をするためには、相手の反論を予測して書くというもう一段上のレベルに進まなければならない。そのためには、一つの課題に関して、まず反対でも賛成でも自分の意見を書いてみて、反対側と賛成側に分かれたディベートを経た上でもう一度反論

を予測して意見を書いてみるという練習をつけ加えたかったが、時間の制約があつてできなかった。また、反対するという設定ではあるが、自分はどうしても賛成意見が書きたいという学生もいたことから、三学期にそのようなディベートの試みを是非行ってみたい。⁽²⁰⁾

5. 指導についての評価、及び今後の課題

- ・二学期に書かせる作文については、書く作業をする上で必要な想像力を呼び起こすことができるよう、かなり早くからそのテーマをめぐって、読解や聞き取り、意見の発表など一連の連続作業を開始している。かつて多かつた何を書いたらいいかわからないと嘆く学生を出さないよう、引き続き他の言語技能養成のための練習との統合を意識した、連続作業を工夫していきたい。
- ・まだ年も若く問題意識もない学生には、材料を集め、それを並べ替え、組み替えつつ自分の思考を練るという過程を経験させなければならない。母国語でも大変なことを外国語でやる気になってもらうには、表現意欲を高める工夫も欠かすことができない。そのためには、先輩のモデル文を紹介するとか、添削した後のクラスメンバーの作文をワープロに入れ、プリントアウトし、名前なしで皆に配ってだれの作文か推測させるなど、赤字を入れて学生を落胆させるだけではない返却の「演出」なども必要であろう。
それと同時に、書く内容で悩む学生には、「書く」ことに専念させるためにも、内容をある程度具体化してあるグラフや図などの資料を与えることも、特に、初級から中級に進む段階では有効であろう。
- ・ややミクロな視点から作文を見ると、学生はパラグラフ内の構造、文章のパラグラフ構成はもちろん、中級のテキストの語彙、文型まで実に上手に使っていることが分かる。そこで、指導に当たる側は、ゆくゆくは中級の文型、語彙を使ってどんなことが言えるのかという観点から文型、語彙を組み直した表現文型のリスト、及び練習問題を作って学生に与えられるようにしたい。
- ・後半期の作文は後に小論文を書かせるための前哨的なもので、「意見を述べるために、根拠として経験や資料を選ぶのだ」という流れのもとで全ての学生に論証的な文を書かせるところまでいくのは無理である。だが、指導側は後のことを考えて、学生がそれを書くことによって、結果的に、論文を書くためにはどういう構造にしたらよいかを体得できるような設定をする必要がある。また、描写や事実を述べる文の文末と意見文に使う文末表現の違いをは

っきり認識できるよう、文末表現のまとめを行うことも今後の課題である。後に求められるレポート、論文では、事実と判断と意見を分けて書くことが必須であるからである。

- ・レポートや小論文を書く前に、主題文を書くことが有効である⁽²¹⁾が、学生にも後半期には、作文を本格的に書く前に、主題文とは言わないまでもメモ的な小作文を書かせるのはどうか。意見文、論説文には、自分の意見に説得力を持たせるために、構成の「見取り図」であるアウトラインのみならず、自分の意見、主張はどんなことなのか、そのために自分はどんな根拠を示して、どう相手を説得していくのかという「戦略」⁽²²⁾を明確にしておくことが必要である。全部書いてしまってから添削するのでは、外国語で書く学生の負担も大きいし、添削の焦点がぼけてしまうため、「戦略」のプランのうちに指導側が作文の構造的添削ができるよう、小作文を書かせる設定を提案する。

6. おわりに

一学期の終わりから二学期にかけて次第に制約の少ない、学生の自由度の大きい作文を書かせる段になると、文型定着の手段としての作文ではなく、国語教育などで強調される思考過程としての作文という面を無視できなくなる。

外国語教育の一環としての作文指導なのだから、文法、語法に誤りのない作文を書かせるようにすればよいという立場もあろう。しかし、最近の第二言語習得理論によれば、第二言語で作文を書く限り、errorは永久に出る可能性のあるものである。また、言語獲得過程における、表現上のerrorは学習者の積極的な言語運用実験の結果として評価すべき場合もある。⁽²³⁾

そこで、正確さという尺度を全てとは考えず、「書くことによって、考える」過程を経験させることを目的に、センターの作文担当者は、学生が「日本語を書く」作文の域を脱し「日本語で考え、表現する」ことができるようになる指導を行うことをめざしていかなければならない。そのことの達成が作文教育のみならず、全体として「橋渡し」の教育である、予備教育課程の目標なのではないだろうか。

注

- (1) 学部進学学生の予備教育課程における文章表現の指導全般、及び特に初級レベルでの文章表現の練習法については、姫野(1981)に詳しい。
- (2) センター(当時は東京外国語大学外国語学部附属日本語学校)の一部の学生

に論文を書くための方策を段階的に指導した飯野（1987）の報告がある。

- (3) 小宮は既に初級の後半の段階から、レポートや論文を書くための構造的な指導が可能だとして、自らの担当クラスの学生に対して行った実践を報告している。小宮(1987)(1988)参照。
- (4) 長谷川(1981) pp. 47
- (5) 澤田は「論文とは大論文であれ小論文であれ、一定の明確な問を呈示してそれに答えるもの」と定義しており、よい論文は、主要な問、主問が論文の大黒柱ないし焦点として全体を貫いている、統一 unity、連関 coherence、展開 development において優れた論文であると述べている。澤田(1983)
- (6) このグリッドは、附属日本語学校当時の教官熊井浩子氏(現静岡大学)が「話し方」の授業のために作成したものである。
- (7) K. ジョンソン(1984)は、「相互にテーマが関連している作業が連続する場合、それぞれの作業はその後に続く作業に豊富なコンテクストを与える」と、このような統合的な技能養成の方法を支持している。
- (8) 佐久間(1976) pp. 155
- (9) 作文教育と話し方指導を関連づけるカリキュラムは、主として当センター教官の田山のり子氏が担当した。
- (10) 樺島(1979) pp. 174
- (11) 作文を書く前にアウトラインを考えさせる指導は、初級の段階から行っている。
- (12) 永野賢(1986) pp. 236-239, pp. 270-273
- (13)(15) 文章構成については、市川(1978)佐久間(1987)での用語を用いた。原則的に、結論がどの文章のどの部分に現れるかで、文章構造を6つに分類している。但し、両者とも、無括弧・散括弧の文章の評価までは行っていない。
- (14) 木戸(1992)の調査によれば、意見文の一つの典型である新聞の投書の場合、尾括弧と双括弧の文章構成が7割を占めているとのことである。
- (16) 接続詞の分類は、市川(1978)に従った。
- (17) 木下(1981)
- (18) 1991年度二学期期末に行った作文の試験では、賛成か反対かを選ぶことができたにもかかわらず、反対意見を選んだ学生の方が多かった。
- (19) 「刺激文」は、当センター教官の川上京子氏の原案をもとに作成した。
- (20) 1993年度三学期話し方の選択クラスで一部の学生を対象として行った。

(21) 木下(1990) pp. 55-57

(22) 澤田(1983) pp. 3-7

(23) Brown(1987) pp. 170

引用参考文献

- 飯野 清士 1987 「論説文を書く作文指導の試み—学部で論文を書く前に—」
『日本語学校論集』14号
- 市川 孝 1978 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 樺島 忠夫 1979 『文章のスタイルブック』 大修館書店
- 木下 是雄 1981 『理科系の作文技術』 中公新書624 中央公論社
- 木下 是雄 1990 『レポートの組み立て方』ちくまライブラリー36 筑摩書房
- 木戸 光子 1992 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55号
- 小宮千鶴子 1987 「文章構成法による作文指導の試み—初級後半における内容
作り・構成を中心として—」『日本語学校論集』14号
- 小宮千鶴子 1988 「初級の最終段階におけるプランと推敲の指導」『日本語学
校論集』15号
- 小宮千鶴子 1989 「中級作文におけるプランの指導」『日本語学校論集』16号
- 佐藤勢紀子 1993 「論文作成をめざす作文指導—目的に応じた教材の利用法—」
『日本語教育』79号
- 佐久間まゆみ 1976 「段落の要約を主とした中級日本語の指導について」
『日本語学校論集』3号
- 佐久間まゆみ 1987 「論説文の文章・文段と要約文の類型について」『日本語
論集』3号 筑波大学留学生教育センター
- 澤田 昭夫 1977 『論文の書き方』講談社学術文庫153 講談社
- 澤田 昭夫 1983 『論文のレトリック』講談社学術文庫604 講談社
- K. ジョソソ / K. モロウ 1984 『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』桐原
書店 (原著名 Communication in the Classroom)
- 永野 賢 1986 『文章論総説』朝倉書店
- 長谷川 泉 1981 『新編 国語表現ハンドブック』明治書院
- 姫野 昌子 1981 「文章表現の指導」『日本語教育』43号
- Brown, H. Douglas. 1987. "Principles of Language Learning and Teaching",
PRENTICE-HALL, INC.

資料 a

第二学期 作文2 「自分の国の紹介」

日本人の高校生が学生新聞の記事にするために、あなたの国について知りたいそうです。あなたの国を紹介する作文を書いてください。

2つか、3つの項目 (item) を選んで、まとめてください。

例： 前書き

I 国土

II 国の花

III 食生活

後書き

項目例：果物、買物（店）案内、民族衣装、国土、国の花、行事、食生活、
いい（悪い？）習慣、交通、ことわざ・言い伝え、昔話、音楽...

説明のしかたを工夫してください。もしその高校生があなたの国についてあまり知らなくても、作文を読めばよくわかるようにわかりやすく説明してください。

あなたでなければ書けない作文を書いてください。国の案内書のコピーのような作文ではいけません。

（主語 subject と）述語 predicate をはっきりさせてください。

初めに計画を立てて、アウトラインを作ってから、書きはじめてください。

パラグラフ、文と文とのつながりが自然になるように工夫してください。

「話し方」の時間に発表したことを書いてもいいです。しかし、その場合は書き言葉に直すことを忘れないでください。

字数：800字以上 文体：普通体（「だ」、「である」などの形）

資料c

二学期 作文4 「日本で見たこと」

あなたはこれまでの日本の生活の中で、いろいろな光景を見たり、あるいは、自分で実際にいろいろな体験をしたりしたことでしょう。そんな時、あなたが今まで思っていたことと大きく違って、びっくりしたり、なぜなのだろうと考えてしまったことはありませんか。

実際に見たり、体験したことを一例としてあげながら、あなたの考えをまとめて書いてみましょう。

※書くときに注意すること

- ・今までは説明文を中心に書いてきましたが、これからは、自分の考えを述べる練習をしましょう。これは大学に入ってから、とても大切です。
- ・今回は、事実（例）をもとに、感想（自分の考えや思想）を述べてください。
- ・次の作文は先輩が書いたものです。参考にして下さい。

また、14課の本文に書かれていることも参考になるでしょう。

字数：800字程度

モデル文

「ある光景」

A わたしは中河原の駅から学校へもどる途中でこんな光景を見た。駅の構内^{こうない}では、電車から降りたばかりのたくさんの人が雨のやむのを待っていた。その日は急に雨が降ってきたので、どの人も傘を持っていなかったのである。やがて、また、電車が駅に着いた。そして、ある若いカップルが電車から降りてきた。その男性のほうはたいへん急いでいるようで、構内からすぐ雨の中へ出て行こうとした。と同時に、女性が後ろから男性に傘をさしかけたのである。ところが、その男性は傘をさしかけられても、お礼をいわないばかりではなく、早足で歩き始めた。女性は大きい荷物を持っている上に、男性と比べると足が遅い。それなのに、自分はぬれながらも、男性の後ろから傘をさしかけながら一生懸命ついて行った。

このような光景を見て、わたしは「この二人は恋人同士ではない。主人と召使だ」と特に男性を腹立たしく思った。わたしは、シンガポールでレイディース・ファーストという習慣に慣れていたので（もちろん、国にいるときは恋人にそのようにしていましたよ！）、日本の男性と女性の関係はまるで主従関係のよう^{しゅじゆう}に思われたのである。このようなことをやらせられる女性は将来どんな従順な妻になるのだろうか、また、このようなことをやらせる男性は将来どんな立派な「主人」になるのだろうかと案じられた。

国にいるときわたしはレイディース・ファーストという習慣をめんどくさいと思っていた。そして、おとなしくて従順な日本の奥さんらしい奥さんがいいと思ったりもした。しかし、今は違う。やっぱり恋人の関係でも、夫婦の関係でも対等であるのがいちばんいい。優しさとは弱さではない。女らしいということはただ男性の言うことを聞いて、人形のようにニコニコしていることではないはずである。そんなことを考えているうちに、ちょっと強くて、あまり「女らしい」とは言えない国の恋人のことがなつかしく思い出された。

A : 自分が見た光景

B : 感想・意見

資料 d

二学期 作文5 「テレビのコマーシャル」

1. 今回の作文の目的：資料について説明する。

それに基づいて意見を述べる。

2. 字数：800～1000字

3. 次の質問を参考にして、書いて下さい。図表は全部で4種類ありますが、すべてを使う必要はありません。

① 日本の1年間の広告費はいくらか。(図2)

・広告にはどんな種類があるか、また、その中で最も多いのは何か。

② マス・メディアから見た広告

・新聞や民間放送においては、広告はどんな存在か。

③ スポンサーから見た広告

・何のために広告するのか。

・いつ、テレビ広告の方が新聞広告よりも多くなったか。(図1)

また、それはどうしてか。

(たとえば、あなたが会社の社長だったら、どちらで広告するか。)

④ 消費者(物を買って使う人)から見た広告

・どんな時、広告を必要とするか。

・生活に役立っていると考える人が多いのか少ないのか。(表1)

・若者はテレビコマーシャルをどのように考えているのか。(図3)

⑤ 「広告は社会を映す鏡」と言われるが、日本の広告の特徴は、どんなこと

か。(または、日本のテレビコマーシャルに対するあなたの意見は?)

4. 図表を説明するときの書き方の例

・図1によると、日本の1年間の広告費は5.7兆円で、その中でもテレビの広告が多く、約3割である。

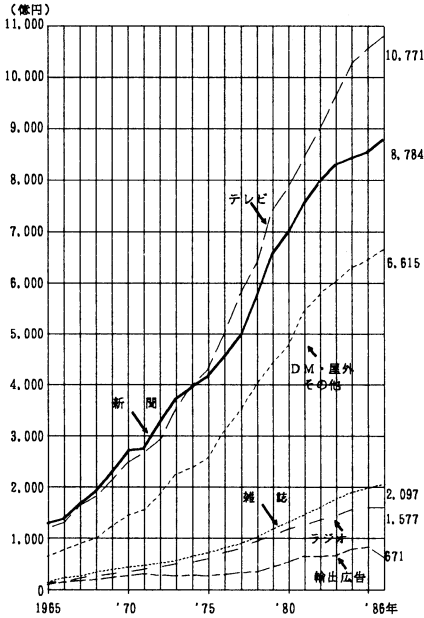
・生活に広告を役立てている人が多いことが、表1から言えよう。

・表1のように、日本の男性は、女性よりも生活に広告を役立てている人が少ない。

・図2から、意外にラジオによる広告が少ないことがわかる。

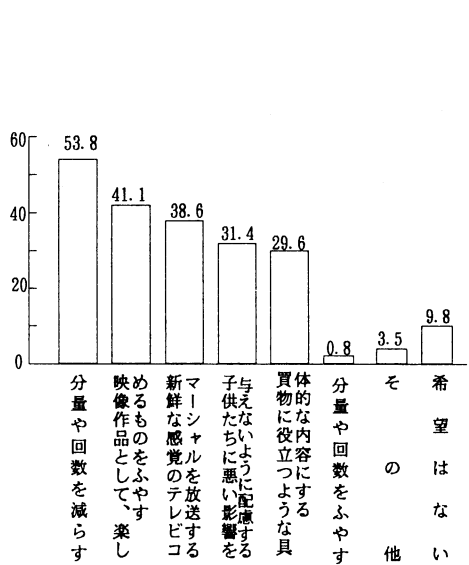
・ラジオによる広告は意外に少ないのである。図1を見てほしい。テレビの広告は1兆円であるのに対し、ラジオの広告は、その約6分の1の約1600億円に過ぎないのである。ラジオは広告の手段としては適していないのだろうか。

図1 広告費の変化¹⁾



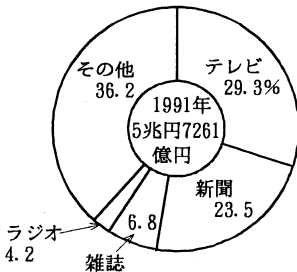
電通 『日本の広告費』

図3 テレビコマーシャルに対する若者の意見³⁾



放送番組向上委員会 『若い人たちとテレビ調査』 1984年

図2 1991年に使われた広告費²⁾



電通 『日本の広告費』

表1 広告は生活に役立っているか⁴⁾

	男%	女%
非常に役立っている	23.0	23.6
役立っている	36.3	45.4
あまり役立っていない	23.8	27.8
全く役立っていない	6.6	2.7
わからない	0.4	0.6

新聞六社調査研究会 『新聞六社調査報告書』 1986年

- 1), 3), 4) 山本明他編 『図説日本のマスコミュニケーション第2版』NHKブックス528より
- 2) 『日本国勢図会1992』国勢社より

資料 e

二学期 作文6 「反対意見を述べる」

「厳しい大学入学試験は絶対に必要である」

最近、日本ではベビー・ブームも終わり、若者の数が減ってきた。そのため、大学側は大学に入りたいという学生をちやほやし、入学試験をしないとやっている大学さえ出てきたという。したがって、「猫も杓子」も皆大学へ行くというわけである。とんでもないことだ。

大学とは、義務教育と高等学校の教育を受けた後に行く最高学府である。つまり、社会の進歩、発展のためになる少数の優れた人間だけが行けばいいところなのである。普通の人が入る必要は全くない。そういうところへ進む人は能力のある人、厳しく選ばれた人でなくてはならないのは当然のことである。そこで、大学に入る能力のある人を選ぶことが絶対に必要になる。これこそ「大学入学試験」である。したがって、このような試験は厳しければ厳しいほどいい。

厳しい入学試験のため、20歳前後の人生の成長期に、いわゆる「受験戦争」を戦っていくことも必要なことである。そのような人間は精神的に成長し強くなっていく。仮に、入学試験がなかったら、あるいは、非常に易しかったらどうだろう。能力の低い学生が大学に入って来て、程度の高すぎる講義が理解できないだろう。国が大学に払っている補助金の無駄になる。また学生にとっても、大学にとっても、お金と時間の無駄ではないか。このような学生が大学に入って来ることは絶対避けるべきである。そのためには、大学入学試験がなくなるなどということがあってはならない。それよりむしろ大学側は受験生にもっと厳しい入学試験を行うべきである。

上の文に対して反対の意見を述べてください。(教科書18課参照)

まず、上の文に反対することを示してください。

次に、読者が納得できるように反対理由をよく説明してください。

最後に、もう一度、結論として、あなたの意見を述べます。

文体：普通体

字数：800字以内

資料 f

意見を言うとき大切なこと

いちばん初めに自分の意見をはっきり表明した方がいい。

私は大学入学試験が絶対に必要であると言う意見に反対である。(賛成である)
私は大学入学試験が 必要だとは思わない。 / 必要ではないと思う。

次に、その主な理由を大きくまとめて言う。そして、それをささえる例を挙げる。

というのは、学生、特に高校生が大学入学試験だけを大切に、
(なぜなら) 狭い範囲の勉強しかしなくなる からである。

例：競争しつつ知識を覚えるだけの高校生、遊んでばかりの無気力な大学生

というのは、限られた大学入学試験では大学教育に合った人を
選ぶことはできないと思う からである。

例：入試の時間制限、入学前までの知識量しか計れない、応用力は計れない

というのは、一回だけの試験の結果はその人の本当の能力や
才能を反映していない からである。

例：想像性、創造性が計れない。貴重な人材を失う - アイソユイトン イヅツ

というのは、大学入学試験というものは政府や大学側が
入学したい学生に対して行なう差別だと思っ からである。

例：ほしいタイプの学生だけ集める。経済成長による豊かさを大学教育に

というのは、大学入試があると、高校生はもちろんのこと、
子どもたちの生活まで苦しくなる(歪む) からである。

例：子供の自由、家族の団らんがなくなる、勉強嫌いになる、無駄な出費

終わりに、もう一度初めのメッセージに戻る。

したがって、大学入学試験は必要ではないと思うのである。

A REPORT ON TEACHING WRITING SKILLS AT AN INTERMEDIATE LEVEL AIMING AT BRIDGING THE GAP BETWEEN BASIC WRITING AND WRITING ESSAYS

FUJIMURA Tomoko, KANEKO Hiroko & ITAMI Chie

This is a report on the intermediate level writing class of the Japanese Language Center for International Students of Tokyo University of Foreign Studies in which students get preparatory training for university studies.

The writing class aims to teach the writing of essays and research reports which students are expected to write at universities.

It is not easy for international students to pursue composing essays or writing research reports after practising basic writing. In order to bridge the gap between basic writing and academic subject writing, we have made some shifts in teaching of writing at an intermediate level as follows:

- 1) The goal of the intermediate writing class is to write expository essays which are focused mainly on clarity of description, and critical essays based on argument. It is not enough to indicate a goal, but to instruct how to get to it. Therefore, we have taught them how to find ideas and put them appropriately on paper with unity, coherence and development, though teachers are usually concerned mainly about grammatical accuracy in the teaching of writing.
- 2) In the Center, curriculum of Japanese is designed to integrate students' skills (reading, listening, speaking and writing). As for writing class, to perform the instruction effectively we devised some teaching method in terms of integrated approach. We use a model composition and some reading materials for reference, and let the students discuss the theme according to each point of instruction.

The significance of the class should be discussed further in the context of current demands for second language learning.